焼畑農法における作付体系とその成立要因に関する研究

第7報 焼畑に関係する俚言による作付体系の成立要因の推究

菅原清康・進藤 隆*

Studies in Cropping System of Slash-and-Burn

Method of Agriculture and its Origin

VII. A discussion on the origin of cropping system in
slash-and-burn method of agriculture by means of
country saying

Seiko SUGAWARA and Takashi SHINDO*

1 緒 言

著者らは一連の本研究で^{1~6)}旧焼畑農法における作付体系およびその成立要因の探索について、全国的なアンケート、文献、現地調査などによったが、直接的かつ容易にそれを究明することができなかった。そこでやむなく全国から得られた多数の資料を、著者らの焼畑に関する実験的研究¹⁾で求められた成果を尺度として類推による分類を行ない、その結果から成立要因を推究する方法をとった³⁾。したがって、実証に基く正確な成立要因としてはやや不確実な側面もあるようにみられた。一方、長年にわたる本研究の旧焼畑の現地調査に際し、大部分の地区で1~5程度の焼畑に関する俚言(俚言的なものも含む)が得られ、それが集積されてゆく過程でその中のかなり多くの俚言が作付体系の成立要因に関係が深いように思われた。しかりとすれば、作付体系の成立要因に関与するとみられる多数の俚言を拾集し、それらにある共通

的な意味を有するいくつかの項目に分類し、その個々の項目について焼畑農法との関係を検討すれば、少なくともそれらの俚言が求められた地域だけには適用でき、しかも、作付体系の成立要因をかなり確実に究明できるのではないかと思考されるに至った。もしそれが可能であるとするれば、既報³⁾の妥当性を裏づけるとともにその欠点を補ない、また研究推進の方法上におけるきわめて有力な一手段であるとも考えられ、よって拾集済の資料を用い上記の可否を究明しようとした。

2 調査材料ならびに調査方法

1973~1980年、新潟県内32地区^{4,6)}の現地調査で得られた旧焼畑に関する俚言(方言や俚言的なものも含む)は150例におよんだが、それらの中から作付体系の成立要因に関与するとみられる81例を抽出した。それらの俚言を共通的な意味を有するとみられる6項目に分類し、それら個々の項目と焼畑農法との関係に検討を

昭和56年4月7日受理

新潟大学農学部附属農場、新潟市五十嵐二ノ町 〒950-21

*新潟県立加茂農林高等学校、新潟県加茂市神明町 〒959-13

Farm, Faculty of Agr., Niigata Univ., Igarashi-ninocho, Niigata 950-21

*Kamo Senior High School of Agr. and Forest, Kamo, Niigata 959-13

加え、帰納的に作付体系の成立要因をみちびきだすようにした。

3 調査結果ならびに考察

新潟県の焼畑農法における作付体系の成立要因に関与するとみられる俚言の分類については第1表に示す通りである。

第1表によれば、第1類はソバを主とする焼畑作物の生育の短期性を意味する8例である。新潟県の場合、普通の焼畑は7月上、中旬伐採、7月下～8月上旬火入れを行なって造成するから、その後播種しても11月上旬頃の降霜前には収穫ができ、無肥料でもかなりの収量が期待でき、しかも主食や補助食料を確保する必要からソバ、カブ、ダイコンなどそれらの条件に合致する作物が初年度に位置づけられている。したがって、播種時期や生育期間の制約といったことが作付体系の成立要因になるのではなかろうか。

第2類は主食またはその補助的食糧を生産するため、焼畑にいかなる作物が適合するかといった16例である。旧焼畑農法では主食およびその補助的食糧の生産確保が絶対的命題で、たとえ他に多数の有用な作物があるにしても、実際の焼畑で無肥料、無耕うんに耐えその命題を果たす作物でなければ意味がない。その目的に合致する作物としてはソバ、アワ、ヒエ、キビ、アズキ、ダイズ、カブ、ダイコンなどがあり、多数の俚言はそれらの作物の適合性とともを選択を誤らぬようにとの伝承であるように考えられる。全般的にみれば、焼畑で主食やその補助的食料として収量確保が可能な作物の選択といったことが作付体系の成立要因であるといえよう。

第3類は焼畑作物の貯蔵性に関する13例である。焼畑は無肥料、無耕うん、散播が原則で、急傾斜地や不整地など不良条件の場所で野鳥や雑草の被害を受けながらの実施であるから、全般的に収量が著しく少ない²⁾。一方、不作の年や大飢饉に遭遇して数集落が消滅した事例なども少なくない⁶⁾。そのため自己防衛上必然的に食糧の備蓄が考えられ、それに適合するソバ、アワ、ヒエなど長期間貯蔵できる作物が焼畑の基幹作

物として選定され、他の諸要因とも関係しあってそれらの作物が何年目かに配列されるようになったと考えられる。したがって、貯蔵性の高い作物の選択ということが作付体系の成立要因であるとみることができる。

第4類は焼畑作物の配列関係を意味する17例で、これはもっとも直接的に焼畑の作付体系の実態を示すものである。焼畑には一定の継続年数とこの間における作物の配列がおおむね決定されていて、それは地区や時代などによってかなり異なっているが⁴⁾、明治、大正時代のわが国全体、および新潟県における農業型焼畑²⁾の基本的作付体系は4年継続のソバ→アワ・ヒエ→アズキ→ダイズではないかと指摘した^{2,4)}。第4類の俚言群を総合的にみれば、上記の基本的作付体系が明らかに浮上し、既報⁴⁾の妥当性を裏づけているものと考えられる。このような焼畑作物の配列は他の諸要因とも関連し、かなりの長期間を経て成立したものと思われるが、その中心をなすものは焼畑の有効な利用で、結局焼畑実施全期間中の合理的な地力の利用が作付体系の成立要因ということになる。

第5類は農作業の省力化を意味する20例である。焼畑は極粗放かつ一種の掠奪農法であるから、なるべく農作業の省力化を考えることは至極当然のことである。その方法として雑草抑制による除草作業の軽減に対しては、焼畑の造成を夏期に行なうこと、素足で農作業を行なうこと、ヒエやアワはなるべく連作をさけること、2年目のひこばえ(樹木の枝条)は必ず除去することなどを示し、また2年目にアワやヒエを作付すると3年目には雑草が多発¹⁾するから、雑草に対して強い蔓性小粒種のアズキを位置づけ、最終年にエゴマを配列しその被覆力や他感作用(アレロパシーの存在も考えられる)⁵⁾による雑草の多発防止や次期焼畑造成の労力軽減⁵⁾など作物の生理生態的特性を巧に利用した配列がうかがえる。また、アズキとダイズをセットにして播種し野兎の食害や補播の省力を考え、収穫作業ではソバ、ダイズ、エゴマ、ナタネなどは現地脱穀、アワ、ヒエ、キビなどは穂のみ切りとり、ともに運搬作業の軽減化がはかられている。したがって、第5類は除草、収穫、

作物の生理生態的特性などを考慮した農作業の省力化といった作付体系の成立要因に帰納することができる。

第6類はエゴマ、ナタネ、ゴマなど自家消費とともに主として現金収入源になる工芸作物などに関する7例である。それらの作物の作付はごく限られた一部の地域に点在するのみで一般的な焼畑作物ではないが、しかしかなり広大な特定地域内の数地区で集団的に実施されている例^{5,6)}もあり、全く無視することができない。それらの作物は江戸中期以後から各所で重要な焼畑作物であったといわれ、とくに明治初期から昭和初期頃まで作付地区や作付面積が増大している⁶⁾。また、それらの作物は江戸時代以後、燈油や食用油、または食用として多少は自家消費もなされたであろうが、個々の俚言からみるとかなり重要な現金収入源たる換金作物として選択され、各種の要因と関連して適宜配列されてきたように考えられる。この理由については、とくに明治年代に入ると文化の向上や食生活の改善などによって、それ以前の自給自足や物交関係を主体とした低水準の生活を支えきれず、さりとて他に適当な換金資材にも恵れていなかったことから考えついた焼畑農民の知恵の一つではなかったろうか。このようにみれば、高価で換金性の高い現金収入源としての作物の選択といったことが作付体系の成立要因であるといえよう。

以上のように、旧焼畑の作付体系やその成立要因に何らかの関係があるとみられる多数の俚言を抽出し、それらを共通の内容を含んでいると考えられる6項目に分類し、さらに個々の項目について焼畑農法との関係を検討した結果、それらの全部についてかなり明確な作付体系の成立要因を帰納的に究明することができた。したがって、本研究でなされたような間接的な方法によっても作付体系の成立要因を究明することができ、場合によっては比較的迅速かつ正確に推定できる能率的方法ともなりうる。また、さらに詳細な現地調査の結果や文献などと併用すれば、なお確実な精度の高い成果を期待することができる。

今日、突然ある特定の小地区の旧焼畑の作付

体系やその成立要因を究明しようとして現地調査を行なってみても、直接かつ正確にそれらを探索することは容易でない。それは、各地区ごとに少なくとも上記の6要因の一部か全部が直接間接に関与し合って複雑化しているし、また旧焼畑に関する2, 3の俚言しか求められないし、古老の語る内容も人によって著しく異なり、それらをいかに詮索してみても到底結論を引き出せないからである。この場合、本研究で示されたような全県かまたは数郡を対象としたかなり大地域にわたる俚言処理の尺度があれば、それらに含まれている地区である限り、いきなり現地調査を行なったとしても、それらの尺度を準用することによって比較的正確かつ能率的に作付体系の成立要因を推究できる可能性がある。

また、本研究で除外された71例の俚言については表示はしないが、それらは焼畑の造成法、播種法、作物の移植や除草法、焼畑作物の貸借関係、焼畑作物の利用法や調理法、焼畑耕作の重労働、米を求める念願、自然の生態系の保持、その他、などに分類され、たとえば“火入れは峯の真上から（斜面最上部に点火せよ）＝焼畑の造成”、“かんのアワのだらまき（種子、木灰、下肥混合）3倍とれる＝播種法”、“アワはうねせ（欠株カ所）に植えてもよいが、ヒエは全く育たない＝移植法”、“赤子さるづら（猿のような顔）めしのり飲ませて生かしたい＝米を求める念願”、“マメをとったらかのやきやめて野山にもどせ、かんのばかりが能じゃない＝自然の生態系保持”といった類である。これらの俚言群は作付体系の成立要因とは直接関係はないが、旧焼畑農法の実態を理解するためにはきわめて貴重な資料である。また、大部分の俚言はいわゆる7, 5調のものが多く、これは口唱の容易さや伝承の確実を期したことによるのではなからうか。いずれにしても旧焼畑地区に残存する多くの俚言を鍵として、焼畑農法の作付体系やその成立要因を正確、迅速かつ容易に推究できるということは、主題の研究推進のための方法上における有力な一手段としてきわめて有意義であると思われる。

第1表 作付体系の成立要因に関係があるとみられる俚言 (1974~1980)

作物名	俚言	地区	成立要因
ソバ	人のうわさも75日, かの (焼畑) のソバ・イモ同じく75日 ソバは75日で人の口に入る イネの半分ソバ・イモ同じ, とともに70, 80日 火入れの後はソバよりほかに播くものなし かんの (焼畑) のはじめはソバ・カブ・ダイコン かのの火入れは旧暦6月, ソバはつづいて旧暦7月 (播種) かんのソバ播きははじめ (1年目) とおわり (最終年)	全域 全域 松之山 川内 松代 上川 太田新田	第1類 特定の焼畑作物生育 の短期性 (播種時期や生育期 間の制約)
アワ	春かんの火入れの後はヒエより先にアワを播け	穴藤	
ソバ	1年目のソバは山ほどとれる, ソバには不作の年がない ソバはめくら播 (適当に散播) 播きさえすればただとれる ソバには夏がれ (乾燥) 虫など (病虫害) つかない 日でり, 雨, 風 (天候が悪くても) かんのソバはよくとれる	三面 三面 仙納 逆巻	第2類 焼畑に作付する適応 作物の選定
アワ	火入れの後の1年2年アワは黄金のようになる 2, 3年かならずアワ播けかのばたけ (焼畑) 命の元はかんのやき (焼畑) でもらうアワとヒエ きりかえ畑 (焼畑) は4年間, アワはほか (他の作物) より倍とれる かんのやき (焼畑), 一番よいのはアワ, イグサ (エゴマ)	太田新田 三面 川内 大白川新田	(主食やその補助食 糧として焼畑で収量 確保が可能な作物の 選定)
ヒエ	ヒエはアワよりかます (収量) が多い 雪消えにすぐヒエを播け, 早ければ早いほど穂がでかい (大きい)	関川 前倉 清水河原	
アズキ	のなぎ (焼畑) のアズキはふり播く (散播) だけでただとり 岡 (普通畑) よりとれるかんのやきのアズキ	茶屋ヶ原 山直海	
ダイズ	のやき (焼畑) のマメはますからこぼれる きりかえ畑には必ずマメ播け, 鳥にくれてもまだ残る	茶屋ヶ原 大白川新田	
ダイコン	スギを切ったらダイコン・カブ播け, 色のよいのが山ほどとれる	橋田	
ソバ	湿りと虫さえよければ, かんのソバは6, 7年 (貯蔵可能)	水野	第3類
アワ	アワは10年 (間も貯蔵できて) 隣ほとりにもくられる アワ・ヒエ10年 (間も貯蔵して) 不作に備えよ アワはヒエよりすっぱやい (貯蔵性が低い) アワは火棚に, ヒエくら (土蔵) に, ついたソバ粉は台所 不作の年はためたアワっ穂で食いつなぐ	東長嶋 反り口 大赤沢 実川 見倉 見玉 逆巻 見玉 前倉 全域 大赤沢 前倉	焼畑作物の貯蔵性 (貯蔵性の高い作物 の選定)
ヒエ	この子3つと5つと7つ, ぢいちゃんのとったヒエっ穂食う ヒエは宝もの40年 (も貯蔵することができる) モモ・クリ3年カキ8年, かんのヒエは30年 ヒエはためるほど勢がでる (焼畑耕作の意欲がわく) ヒエは何年たってもくさらない (長期間貯蔵が可能) 人の命は50年, ヒエはそれより10年早い (同上)		
キビ	キビは3年アワ10年, かんのヒエは40年		
ソバ	かんのうのならし (習慣) はソバからはじまる	水野	第4類
アワ	ソバあとのかのではまずアワ作れ, マメとエゴマはその後に おそい (焼畑の後期), おそい (適期後) のアワ播き馬鹿がする ソバ, アワ, マメ (の作付体系) は先祖のおしえ アワやヒエにはいりこ (マメ類や野菜の混作) をやれ	実川 岩野 松之山 穴藤	焼畑作物の配列 (焼畑実施全期間中 の合理的な地力利用)

作物名	俣言	地区	成立要因
ヒエ	アワの後にはアズキを播いて、それがすんだらマメがよい かんのソバあとまずヒエ播いて、それがすんだらアズキ播け ヒエは早く（焼畑早期）播け、マメはおそく播け ヒエのつづきまき（連作）貧乏神が喜ぶ（してはならない） アワの後にはヒエがよい、ヒエが先だと草がでる	山直海 前倉 逆巻 川内 川内	
アズキ	アワの後にはアズキ播け 3年目のアズキに不作なし	全域 全域	
ダイズ	マメをとったらかんのやきやめろ（最終年にダイズを） マメがとれなきゃ（収穫が少なかったら）かんのうやめよ アズキのあとにはマメがよい マメは後作（焼畑後期作付）、アワは前作、次はコウゾ	大宿 水野 全域 穴見	
キビ	アワより後に、マメより先にキビを播け	見倉	
ソバ	ソバはやけはた（焼畑）でつぶをとる（現地脱穀）	三面	第5類
アワ	アワっ穂は山で（穂のみ切りとり）、から（稈）は山すて 3年目のアワは草に負ける（なるべく作付しない方がよい）	岡ノ町 上川 全域	農作業の合理化
ヒエ	ヒエ・アワともに次（次年度）が草出る（雑草多発） ヒエは穂切り（穂のみ切りとり）、からはそのまま 2年（連作）おおぎょう（大面積）ヒエまきや荒れっぱなし	三面 川内	（除草、収穫、運搬 及び作物の生理生態 的特性などを考慮し た農作業の省力化）
アズキ	アズキはむしろをつき通す（つるの伸長が旺盛である） アズキは草の上で花が咲く（つる性の品種を用いた） アズキはほかの草を食う（雑草に対して強い） 3年目アズキの菜もぎ2、3回、草とり虫よけやらずもよい 3、4年目の草よけするならつるこ（蔓性小粒種のアズキ）播け	荒川口 上川 上川 岡ノ町 川内	
ダイズ	夏かんの（では）4、5年たって草があってもマメとれる	茶屋ケ原	
エゴマ	エゴマの後のはかんの畑に草がない（雑草が少ない） なげ前（放任前年）にエゴマを播くと畑が荒れない エゴマを播くともどし（次期焼畑の造成）がらくだ びり（最終年の作付）のエゴマは草をとる（雑草が少ない）	清水河原 実川 実川 山北	
全般	はだしに勝る草取りはない（履物から雑草の侵入を防ぐ） かんのやきの枝葉（2年目以後に発生した枝条）早くとれ 草取りやんなら（やりたくなかったら）なんにも履くな マメ（ダイズ）とアズキで兎をよける（両者をセットにして播種）	秋山郷 前倉 見倉 実川	
エゴマ	エゴマの1俵アワ5俵、アワがあっても暮らせない エゴマの1俵米1俵（買うことができる） エゴマは金づる米と油と塩がくる 金のなる草エゴマは薄く（播種）おそい刈取りから（稈）だけだ	大赤沢 大赤沢 前倉 実川	第6類 現金収入源としての 特定作物の選定
バレイショ	イモ（バレイショ）やイモのこ（サトイモ）7分は金に（70%販売）	川内	（高価で換金性の高 い作物の選択）
ナタネ	ナタネ油は家でも使い、余った種で米を買え	荒川口	
ゴマ	やいの（焼畑）の黒ゴマ・エゴマの種はともにお金の元となる	小滝	

4 摘 要

1) 本研究は、新潟県内における旧焼畑農法の作付体系やその成立要因に関与するとみられる多数の俚言を拾集し、それを共通内容と考えられる数項目に分類し、その個々の項目について焼畑農法との関係を検討することによって、作付体系の基本的成立要因を推究することの可否を究明しようとした。

2) 抽出された81例の俚言を分類した結果、①特定焼畑作物生育の短期性8例、②焼畑適応作物の選定16例、③焼畑作物の貯蔵性13例、④焼畑作物の配列17例、⑤農作業の合理化20例、⑥現金収入源としての特定作物の選定7例であった。

3) 6分類された項目の個々について、さらに焼畑農法との関係を検討した結果、新潟県における旧焼畑の作付体系の基本的成立要因は、①播種時期や生育期間の制約、②主食やその補助食糧として焼畑で収量確保が可能な作物の選定、③貯蔵性の高い作物の選定、④焼畑実施全期間中の合理的な地力利用、⑤除草、収穫、作物の生理生態的特性などを考慮した農作業の省力化、⑥高価で換金性が高く現金収入源となる作物の選定、であるように帰納された。実際の焼畑では、これらの成立要因の一部または全部が直接、間接に関与しあって各地区独特の作付体系が成立しているようにみられる。

4) 本研究で試行された方法は、従来の研究方法を補強するもので、焼畑農法における作付体系の成立要因を実証に基き、比較的正確、迅速かつ容易に究明することができ、主題の研究推進上の一手段としてきわめて有意義であると考えられる。

5 引用文献

1) 菅原清康(1979) 焼畑農法における作付体系とその成立要因に関する研究. 第1報 作付体系と収量, 雑草ならびに土壌の化学的性質との関係. 農作業研究 36号: 23-29.

2) 菅原清康(1979) 同上 第2報 わが国における焼畑農法の類型と基本的作付体系. 農作業研究 36号: 30-37.

3) 菅原清康(1980) 同上 第3報 作付体系の成立要因に関する一考察. 農作業研究 38号: 43-48.

4) 菅原清康(1980) 同上 第4報 新潟県における焼畑農法の類型と作付体系の成立要因について. 農作業研究 39号: 31-38.

5) 菅原清康, 進藤 隆(1980) 同上 第5報 新潟県実川地区における焼畑農法の類型と作付体系の成立要因について. 農作業研究 40号: 33-39.

6) 菅原清康, 進藤 隆(1981) 同上 第6報 秋山郷における焼畑の作付体系とその成立要因について. 農作業研究 42号: 37-44.